

Title	動詞のアスペクトと語彙的意義
Author(s)	山口, 巖
Citation	Dynamis : ことばと文化 (1999), 3: 1-13
Issue Date	1999-03-10
URL	http://hdl.handle.net/2433/87654
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

動詞のアスペクトと語彙的意義

山口 巖

はじめに

動詞の意義と語彙的意義の関係については、かつて拙文「行為の質について」¹において取扱おうとしたことがある。しかしながらここにおける取扱いは、多くの点で不十分であったといわねばならない。現在の時点で考えてみれば、その理由には、大きくいって二つがある。その第一は当時、アスペクトと語彙的意義の関係についてしばしば言及されていた「事件」を表すもの、「過程」を表すもの、ならびに「状態」を表すものという区別をそのまま受入れたことである。これらの概念は主として欧米の研究者によって用いられているが、何を以てそれらの「行為の質」を区別すべきかについての基準は甚だ曖昧なままに留まっていた。勢いその分類には、少なくとも個々の「質」の周縁に属するものについて、研究者の恣意の大きな介入を避けることの難しさが、絶えずつきまとって離れなかった。もし、語彙的意義のどの部分が主としてアスペクトに影響を及ぼしたか、そしてそれは何故であったかを明らかにし得たならば、この問題に関して多少とも理論的な前進を見ることができたのではなかったかというのが、今の想いである。

第二点として、論文においては上述した「行為の質」の相互関係を主として考察したが、これは結局問題を一回体、多回体のような、スラヴ語の形態論でいえば「二次派生」に属する問題との関連で論じることになった。しかしこれは問題の一部に過ぎなかった。これらの点についての慮りが欠けていたことが、全体として「論文の質」を貶める原因になったのだと、いまは考えている。

以上のような問題点を考えながら、「行為の質」の具体的な担い手である、語彙的意義の問題を再考してみようというのが、小論の趣旨に外ならない。

¹『人文』第26集 昭和55(1980)年3月 92-115頁、再録『ことばの構造とことばの論理』古代ロシア研究特別号 1998年 272-286頁。

本 論

§1 ロシア語のばあい、いわゆる単純完了体動詞（非前綴完了体動詞²）と呼ばれるような一群の動詞がある。その典型的なものは、*дать*「与える」、*купить*「買う」、*днть*「隠す、置く」など、あるいは *решить*「決める」、*бросить*「投げる」などの動詞群である。この最初のものうち、*дать* と *днть* は、印欧語において現在形に特殊な語根重複 reduplication を伴うアテマティック動詞に一致しているからである。たとえば *δίδωμι* < *di-dō、*τίθημι* < *di-dhē、このほかにこれに属するものとされるものに *ἵσθημι* < *si-stā-「立つ」があるが、これは周知のようにスラヴ語では零階梯をとり、かつ状態を表す接尾辞 *ē によって延長されている。すなわち *стоять* < *sthāē-(cf. *στάτος*) である。この種の重複はインド・イラン語派では *e- の音色をとるとされるが³、語彙的にはギリシア語と重なっている。たとえば、skr. *da-dāmi* < *de-dō、*da-dhāmi* < *de-dhē である。またメイエはアテマティック動詞で同様の重複を伴うものについて、もしこれが重複を伴わないものと対をなしているならば、その相違はアスペクトの相違に帰せられるとしている。彼は *si-zghō に由来する *ἴσχω* と *ἔχω* が存在するばあい、あるいは *μύμνω* に対する *μένω* が存在するばあいを例に挙げ、次のようにいう。

la différence est donc une différence d'«aspéct», la forme à redoublement étant d'aspect «déterminé», c'est-à-dire indiquant un procès dont le terme est envisagé; la forme sans redoublement est d'aspect «indéterminé»; la forme du procès n'est pas envisagé⁴.

ここでメイエがいつている *ἔχω* < *segh- は「もつ」という意味であり、*ἴσχω* < *si-zghō < *si-sgh- 「もつ、保つ、抑える」などの意味を持っている。また *μένω* < *men- は「しっかりと立つ、とどまる」のような意味を持ち、*μύμνω* < *mi-mn- もほぼ同様の意味を持っている。メイエはこの両者の形がアスペクトの相違をもっているとして、重複のある形が、行為の終了を展望していると考えているのである。

§2 この考えの当否は別として、アテマティック動詞の語彙と、ロシア語の非前綴完

² *Русская грамматика*, Академия Наук СССР, М. 1980, (『アカデミー80年文法』) I, p.590.

³ P. Chantraine, *Morphologie historique du grec*, 2^{me} édition, Paris 1967, p.208.

⁴ A. Meillet, *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, University of Alabama Press 1967, p.204.

了体動詞との語彙の重なりは気になるところである。これらの動詞の重複がもつばら現在形にのみ現れ、アオリストその他の時制には現れないことも、特徴的である。そこで「与える」「買う」という動詞の意義の特徴がどのようなところにあるのかを、少しく思弁的に考えてみよう。ある事物を与えるというばあい、この事物がある人の手にある状態から別の人物の手の中に移ることであると、通常は考えられる。日本語のばあいにはこのとき所有権の移動を伴うが、ロシア語のばあいには所有権は移動することもあり、またしないこともある。移動しないときにはこれは日本語の「貸す」の意味になるのであろう。しかし一時的であれ、この事物が一人の人物の支配権から、他の人物の支配権の中に移動することは間違いない。このとき、事物の物理的一が変わることは必ずしも必要とされないことに、特に注意する必要があると思われる。人は自分の前にある事物を指さして、「これは誰それに貸した/与えたものだ」ということは、日常的に見られる現象であると考えられるのである。

もしそうとするならば、この「行為」にとって本質的なのは、位置の移動ではなく、もっと抽象的な観念、すなわち一時的ないしは恒久的な支配権の移動にあるといわなければならないであろう。同じことは「買う」という行為についてもいうことができる。これは「与える」条件として、対価の支払いがつけ加わるが、その結果はやはり所有権の移動である。

τίθημι「置く」のばあいも上述した動詞とよく似ている。これは「安置する」、「引き渡す」などの意味を持ち、その意味するところは、本来あるべきところに置くというほどの意味であると思われる。「あるべきところに」というのは、一つの判断だからである。さらに ἵστυμι も「立たせる」、「据える」、「置く」、「任命する」などの意味を持ち、抽象的な判断という意味合いをもつことが多い。

§3 このように抽象的な判断の意義が本質的なものであるとすると、このような抽象的な意味に過程の意義が加わることは難しいと思われる。すなわち、「与える」という典型的な行為を例にすれば、支配権の移動という観念には、移動の過程を問題にすることが少ないということができよう。

このような目で非前綴完了体動詞のリストを眺めて見れば、ロシア語のばあいにも抽象的な判断という意義が基本になっているものが多いことに気づく。たとえば、*арестовать*「逮捕する」、*арендовать*「賃借りする」、*лишить*「奪う」のように支配権ないし所有権の移動の観念を含むもの、*реши́ть*「決定する、決心する、決める」、

простить「許す」などのように心理的に決定のモメントの存在が鍵となるようなものである。*бросить*「投げる、投げつける、捨てる」は所有権の移動を示すばあいと、手からはなすという決定のモメントの強いと思われる意義とが見られる。また中には、歴史的には前綴動詞であるが、いわゆる連合系列を失って、現代の言語意識においては単一動詞と考えられているものもある。たとえば *обмануть*「欺く」、*обеспечить*「保証する」、*обидеть*「侮辱する」、「怒らせる」、*внушить*「吹き込む」、「(感情などを) 惹き起こす」、*изумить*「驚嘆させる」、*ощутить*「感じる」などである。これらも相手の様子から「欺かれた」、「侮辱された」等の判断が成立するか否かが重要なモメントとなるであろう。

以上の外、この種の動詞には、アスペクトの対をなす動詞が異なった語根から作られたものであるばあいがある。たとえば *говорить* に対する *сказать*「はなす」のようなばあいである。*сказать* は本来 *св-казати* で「示す」ことを原義としていたと考えられる。したがってこれは対格補語をとることも多い。あるいは *брать* — *взять*「取る」がある。*взять* は本来 *възъ-яти* (*яти* < **m*-*tēi*. **m* は **em*- cf. *емлю* の零階梯である) であって、「取る + 上へ = 取り上げる」を意味し、支配権の移動を示すものであった。これに対し不完了体の *брать* < *брати* は **bher-*「運ぶ」(cf. gr. φέρω, lat. ferō, skr. bhārāmi) を原義とし、したがって移動の動詞に属していた。同じく *ловить* — *поймать*「捕らえる、狩る」の対の *поймать* は *взять* の項で述べた語根 **em-* の同じく零階梯で、メイエのいう *sonantes voyelles devant voyelle*⁵ に属する **m-* の形であり、同じく「取る」を原義としている。これに対し *ловить* は名詞 *ловъ*「狩り」から派生したいわゆる *deverbativa* であり⁶、印欧語の **lōw-*「獲物」(cf. skr. *lōtam*「獲物」) に由来している。

特殊なものとして *начать*「始める」と *кончать*「終える」という動詞がある。これらも、判断ないし決定のモメントが強く感じられる。

以上のことを考えれば、たとえば「始めるか始めないか」、「決定するかしないか」、「所有権を放棄するかしないか」といった、いわば二者択一的な判断ないし、事態の存在を前提とするものに、完了体のアスペクトが本来的に帰属しているように思われてく

⁵ A. Meillet, *Introduction...* p.117 et seq.

⁶ М. Фасмер, *Этимологический словарь русского языка*, М. 1967, III p.508.

る。そこに過程の関与が難しいからである。

§4 以上に述べてきたことから、例えば *nepeŭmu* 「渡る」のようなばあいにも、完了体のアスペクトが本来的であることが分かる。なぜならば、「渡る」という「行為」は本来的に実在するものではなく、現実中存在するのは「歩く」という行為でしかないからである。「渡る」という「行為」が存在するのは、ある行為主体が「歩いている」間に、何らかの対象あるいは地点との相対関係が逆になるということが生じたとき、「渡る」という「行為」が言語的に存在することになるのである⁷。このばあい、相対的位置関係の逆転が生じるのは、ある一瞬であるに違いない。このように客観的に存在する行為としては自動詞であり、過程の概念の上に成立する「歩く」という行為が、関係的概念を組み入れることによって、いわば「観念的」に判断を伴う「行為」として立ち現れるとき、完了体のアスペクトを獲得すると考えられるのである。ここで客観的に存在する「行為」というものは、筆者の仮説によれば、自動詞のばあいにはある着目する対象の時間における状態の変化を様式化したものであるから、必然的に過程の概念を含んだものでなくてはならない。いま、着目する対象を x とし、その一定の瞬間における状態を S_x 、時間における状態の変化を $\Delta S_x/\Delta t$ 、過程に付随する条件の集合を K としたとき、ある行為が生起したというのは、 S_x の時間における変化と過程に付随する条件の集合 K を総合的に把握してこれを様式化したものだと考えた。言い換えれば「行為」を異質なものの組として把握しようとしたのである。そしてこれを仮に次のように表現したのである。すなわち、

$$V_{intr.} : [\Delta S_x/\Delta t, K] \quad (1)$$

ここで Δt としたのは、対象の状態の時間における変化を様式化するに必要な時間、言い換えればある状態の時間における変化と付加的な条件の集合からそれが特定の「行為」であると認識するに要する時間を指している。

§5 ここから明らかなように、「客観的に存在する行為」なるものも、言主が必要と判断する付加的条件の集合 K を取り込むことによって、すでに厳密な意味で「客観的に存在する」ものではないが、なお、客観的に存在する「行為」に近いものであるということとはできる。なぜこの種の行為が客観的に存在しないかといえば、たとえば「歩

⁷cf. 拙著「準自動詞について」『ことばの構造とことばの論理』古代ロシア研究特別号 1998, pp.183-194.

く」と「走る」の違いは、「行為」そのものにあるのではなく、行為に付随する、たとえば片方の足が上がっている間、他の足が上がっていないかどうかというような、過程としての「行為」とは異質の要素を取り込むことによって生じるものであると、考えられるからである。

他動詞のばあいにも、「現実存在する行為」は原則として過程の上に成立するものであると考えられるが、明らかに自動詞のばあいよりも、現実との距離は遠くならざるを得ないと考えられる。なぜならばたとえばある着目する対象 — このばあいは人物 — がたとえば手に斧を握って、これを振っているという状況を考えてみる。このときその斧がいかなる他の対象にも接触してはいないならば、「振る」という「行為」であると認識されるであろう。しかしもし「斧」が何か他の対象に接触しているならば、この「対象を打っている」あるいは「叩いている」などと認識するに違いない。このとき着目する対象のみならず、もう一つの対象も、この「行為」を認識する際に必要になる。さらに着目する対象の「行為」の過程において、他の対象の上に状態の変化が生じ、この対象が二つないしそれ以上の部分に分離するということが起こるとすれば、この過程の全体は「切る」あるいは「割る」という行為であると認定されるであろう。「切る」であるか「割る」であるかは、ひとえにこの過程に含まれているであろう付加的な条件の集合の認識の仕方にかかっていると考えられる。すなわちこの種の「行為」の認定のためには、次のような要素が必要となると思われる⁸。

$$V_{tr.} : [\Delta S_x / \Delta t, \Delta S_y / \Delta t, K] \quad (2)$$

このことの故に他動詞のばあいには行為主体以外に他の対象を表示することが必要になるのである。その際、このような客体の存在にも関わらず、それを故意に無視するというばあいもあり得る。たとえば木を切っている人物に向かって「どうしてそんなに斧を振り回しているのか」ということも可能であろう。他動詞のばあい自動詞よりも現実との距離が大であるというのは、偏にこのような事情に基づいていると考えられるのである。

§6 ところでいま「振る」—「打つ」—「切る」という系列の存在について述べた。現実の過程としてはほとんど同じものが互いに異なる「行為」として認識されるばあいである。この中間項をなしている「打つ」という「行為」は「打つべき対象」の存在を

⁸cf. A Consideration on the Category of Transitivity in Russian. 『ことばの構造とことばの論理』古代ロシア研究特別号 1998, pp.171-182.

前提としていることによって目的語の表示を必要とするが、なおこの対象の状態の時間における変化を問題とはしていない。これが「打つ」をして「振る」と「切る」の中間に位置せしめる所以であるが、興味のあることに、クリモフの引用するところによれば、ヤコヴレフ Николай Феофанович Яковлев (1892–1974) が能格言語に属する言語で他動詞であるべきものがしばしば自動詞として扱われ、しかもその意義が「打つ」、「突く」、「刺す」、「つねる」、「口づけする」、「咬む」、「はじく」「待つ」などの、対象の表面にしか行為が及ばないものであることを報告しているという⁹。これが正しいとすれば、その理由は今述べたように、この種の「行為」が副次的な対象の状態の変化を惹起しないか、あるいはそれが極めて軽微なものに過ぎないというところに、求めるべきではあるまいか。いずれにせよ、このような類別を行う言語が複数存在しているとすれば、このような類別が決して恣意的なものではなく、言語による認識の仕方を反映したものとして、一定の客観性を獲得する事になるう。

§7 以上議論の前提となる「行為」の問題について、いささか立ち入った説明をしたが、先ほどの「渡る」あるいは「過ぎる」のような「行為」に話を戻すことにすれば、これは客観的には自動詞に属するものである。しかしある対象との相対的位置関係の変化という、この「行為」の根底にある過程ないし状態の変化とは直接には関係しない、付加的な条件の存在によって、どのような対象に関して行為主体の相対的位置関係がはかれるかを明示する必要が生じ、このことが目的語を必要とするに至ったものであると、いうことができよう。従ってこのばあい、副次的な対象には何らの状態の変化も生じないことになる。

このことから、筆者はこの種の動詞を準他動詞 *verba quasitransitiva* と名付け、その特性をさまざまな角度から考察してきた。その中で、この種の動詞の語彙的意義の構造について、次のような記述を行った¹⁰。

$$V_{qtr.} : [\Delta S_x / \Delta t, S_y, K] \quad (3)$$

すなわちこれは、準他動詞は関係概念(の変化)の語彙的意味への組み込みによって、この関係概念の項をなす対象の表示を必要としはするが、この対象自身は何らの状態の変化を示すものではないということを、示すためのものであった。その後、さらに動詞

⁹拙著『類型学序説』京都大学学術出版会 1995, p.66. Г. А. Климов, *Типологические исследования в СССР, 20–40-е годы*, М. 1981, p.50.

¹⁰Remarks on the Meanings of Russian Verbs. 『ことばの構造とことばの論理』pp.287–301. cf. p.289.

前綴による関係概念の組み込みを考察する中で、準他動詞のばあい、派生原基が自動詞であることから、前綴の組み込みの操作を $Pref \circ$ とし、この操作によって組み込まれる関係概念とその関係項を $\phi(x, y)$ のように示せば、次のようになると考えるに至った¹¹。

$$Pref \circ V_{tr.} : [\Delta S_x / \Delta t, S_y, \phi(x, y) \bullet K] \quad (4)$$

§8 先に挙げたヤコヴレフの報告している種類の動詞について見れば、たとえば「打つ」という動詞は左記の例でいえば、「斧が接触している」ことが条件であり、従って必ずしも接触した対象の状態の変化は惹起されないと考えられる。そのばあい、意義の構造記述は、(3) に挙げた準他動詞のものと同じになってしまうであろう。対象の状態の変化がないばあい、両者の相違は、もしそれが存在するならば、関係概念の相違にあると考えなくてはならないからである。しかしここで要求される対格補語は、準他動詞のばあいのように、組み込まれている関係概念の項であるとは考えることができない。この点に関してこの種の動詞は準他動詞とは区別されるのである。したがってこの種の動詞（名称がないと参照に困難を来すので、ヤコヴレフの報告している種類の動詞を、あまり成功した名称とは思えないが、仮に「半他動詞」 *semitransitiva* とでもしておけば）は、(3) の準他動詞の構造記述が、これを記述するのにもっとも適当なものとも思われてくる。

しかしながら、半他動詞のばあい、すでに述べたように「突く」という動詞の示す行為には、単なる接触を表すばあいもあれば、状態の変化を伴うばあいもあると考えられる。「くちづけ」にしてもそうである。さらに「刺す」という動詞の示す行為は「突く」に対して状態の変化が存在していることが、その前提になっていると考えられる。これらのことを勘案すれば、やはりこれは、対象の変化の欠如ないし表面に限定される軽微な変化を基礎とする、他動詞の一種であると考えべきであろう。すなわち $\Delta S_y / \Delta t$ は S_y における状態の変化の存在しないばあいも含むと考えるのである。そうとすれば、このばあい語彙の構造記述には、やはり他動詞のものが適用されるべきである。しかし過程という観点からすれば、この種の動詞が副次的な対象の状態の(不)変化に認定の基礎を置く程度は、本来の他動詞と比べて比較的軽微であると考えざるを得ない。

§9 このようにして見れば、「持つ」という意義を持つ状態動詞 (*habere* 型動詞) も、

¹¹ 「動詞前綴の意義の組み込みについて」『ことばの構造とことばの論理』pp.319-327. cf. p.323.

この半他動詞に属していると見られる。既に明らかなように、この種の意義を持つ他動詞は、対格言語類型に特徴的なものであって、それ以前の諸言語類型には存在し得ないものである¹²。ロシア語においては、現在のところ理由は不明であるが、数々の「先祖返り」とでもいう現象が見られ、所有のばあいにも、対格言語類型以前の言語類型に見られる *esse* 型の動詞が、一般に所有の意義をもって用いられる¹³ のもその一つのあらわれと思われる。この種の動詞の意義について、筆者はかつて次のように書いた。

ところでたとえば本を手を持っている人を想像すれば明らかなように、*habere* は少なくとも初原的には「ある対象 *Y* の状態がある対象 *X* の状態の一部を構成している」ことをその原義としていたと考えられる。……しかし「*X* の状態」はやがて拡大解釈され、次第に抽象化して「*X* の勢力圏」をも意味するようになったとおもわれる。この場合にはもはや「*Y* の状態」ではなく *Y* のみが問題となるであろう¹⁴。

これが先に述べた半他動詞の定義に合致することは、明らかである。ここでは項 *Y* の存在は必須ではあるが、必ずしも「物理的」な行為がこれに加わっていることは前提とされないであろう。「物理的」な「行為」ないし「力」が働くとするれば、それは項 *Y* の状態を「保持する」、すなわち変化を生じさせないために、働くのである。この類に属する *держать* 「保持する、手にもつ」、*хранить* 「保つ」などについても同様である¹⁵。

観方を変えれば、この類の動詞、特に「持つ」を意味するもののばあいは、項 *X* と項 *Y* との関係のみが重要であることも多い。言い換えれば *habere* の意義が、所有関係を *R* として、 $R(X, Y)$ そのものであるばあいも多いと思われる。この観方からすれば、この動詞は準他動詞の特殊なばあいであると、考えることもできよう。筆者はかつて拡張された *habere* の意義を、*X* の勢力圏を L_x として、 $V(habere) : [S_x, S_y (Y \in L_x)]$ で表せることを指摘し、これと存在動詞 *esse* の意義 $V(esse) : [S_x, L (X \in L)]$ (ここで *L* は存在の場所をあらわす) との親近性を論じたことがある¹⁶。この種の動詞の特異な性格は、これが状態動詞でありながら他動詞であるという、一般的にいえば矛盾したものであるというだけではなく、半他動詞と準他動詞の中間に位置するという点にも

¹²cf. 拙著『類型学序説』京都大学学術出版会 1995, p.103.

¹³cf. *op. cit.* 『類型学序説』pp.157 & seqq.

¹⁴拙著「存在文と存在否定文について」『ことばの構造とことばの論理』p.251.

¹⁵拙著「状態動詞について」『ことばの構造とことばの論理』p.230.

¹⁶拙著「存在動詞について」『ことばの構造とことばの論理』p.251.

見ることができよう。

§10 さらに、他動詞の中にも、関係概念(の変化)を組み込むことによって、行為を認定する対象の状態の変化のほかにも、関係概念の項として表示されることが必要になった、第三の対象を伴うものがある。たとえば サヴィナ・クニーガにみえる *повелью работъ прѣвести е рѣку Саву* 「彼はかれらをサヴェ川を渡すように、奴隷たちに命じた」のようなばあいである¹⁷。

このばあい、動詞 *прѣвести* 「渡す」という動詞に前綴によって組み込まれた相対位置の逆転という関係概念は、もっぱら「サヴェ川」と関係しており、基幹をなす *вести* 「連れていく」という過程の対象は *e* 「彼等」である。これがこの動詞をして二つの対格補語を必要とせしめた理由である。この種の動詞を筆者は仮に「過飽和他動詞」*transitiva persaturata* と名付けたが¹⁸、この種の構文は二つの対格補語の性格の違いを明示できないために、現代語では関係概念の項となるものを、前置詞を介して示すことによって、その性格上の相違を明示することを義務づけるようになった。すなわち、*перевести детей через улицу* 「子どもたちを通りの向こうに渡す」のような表現である。

しかしこのようなばあいに使用される前置詞が示す関係概念は本来は上に示したように、既にして前綴の中に組み込まれているのであるから、いわば冗長なものである。換言すれば、前綴の組み込みによって、たとえば *перевести* が単なる *вести* とは異なる所以のものがここには既に存在しているのである。そうでなければ、これは *вести детей через улицу* としても、何らの不都合もないはずだからである。事実日本語をはじめとして、*перевести* に当たる動詞の存在しない言語は多く存在すると思われる。両者の相違とするところは、現代ロシア語のばあい、一にかかってそのアスペクトの相違に存しているのである。そしてこの *перевести* という動詞が保有する完了体のアスペクトは、偏に一旦冗長とも思われる前綴 *пере-* に依存しているのであり、より正確に言えば、この前綴が過程の観念の介入を招きにくい、関係概念(の変化)を表すものであることによっていると思われる。

§11 ではこのような前綴によって組み込まれる関係概念のあり方はどのようなものかについては、筆者はかつて次のように考えた¹⁹。

¹⁷ 「動詞前綴の意義の組み込みについて」『ことばの構造とことばの論理』p.323.

¹⁸ *op. cit.*, p.323.

¹⁹ *op. cit.*, pp.323-325.

まず今述べた *перевесту* のようなものである。これは次のような構造記述を受けることができる。すなわち、

$$Pref \circ V_{tr.} : [\Delta S_x / \Delta t, \Delta S_y / \Delta t, z, (Rel(x, z) \rightarrow Rel'(x, z)) \bullet K] \quad (5)$$

ここで $Rel(x, z)$, $Rel'(x, z)$ はそれぞれ項 x と z の関係 \rightarrow はその変化を表している。

しかし他動詞にはまだ別の可能性もある。たとえば *пропороть сапог* 「長靴に穴をあける」のようなばあいである。*пороть юбку* 「スカートをほどく」のように、*пороть* は「切る、裂く、解く」などの意味を持ち、対格に立つ名詞の表す対象は状態の変化の担い手を示す。またこのばあい前綴 *про-* の意義は「何かを貫通する」ことを表す。従って *пропороть* は「切って何かに穴をあける」ことを意味している。*про-* の表す関係概念に関わる項は、前綴 *про-* のないときの基幹動詞が要求する対象と同じである。したがって、

$$Pref \circ V_{tr.} : [\Delta S_x / \Delta t, \Delta S_y / \Delta t, (Rel(x, y) \rightarrow Rel'(x, y)) \bullet K] \quad (6)$$

明らかのように、このばあいには状態の変化の担い手である対象以外に、関係概念の項となる対象は表示されない。さらにアスペクトを別にして、このようなばあいに特徴的なのは、基幹となる動詞が状況によっては対格補語をとらないことも可能であるのに対して、この種の前綴動詞は、文脈から推定できるばあいをのぞけば、対格補語をとるのがほとんど義務的だということである。このばあい、対象となる y は基幹動詞の意義を確定するのに必要な対象を表すのに加えて、前綴の要求する関係概念の関係項として、いわば二重の規定を蒙っているのである。これがこの種の動詞に対格補語に存在を義務づける理由であると考えられる。このようなところから、この種の動詞を過飽和他動詞と区別するために、飽和他動詞 *verba saturata* と名付けることにする。

§12 以上述べてきたことから、小論が目的とするところは、既におおよそ明らかであろう。前綴によるか否かに関わらず、過程の観念の介入しにくい関係概念(の変化)を語彙的意義の要素として保有している動詞は、語彙的意義に関して、内在的な完了アスペクトをもつ、というのがその結論である。

これに属する可能性があるのは、従って単体の動詞であって、関係概念の変化が語彙的意義の主要な部分を占めているもの (*дать*, *кунить* の類)、および関係概念の変化

が組み込まれることによって成立する動詞である。この中には準他動詞、他動詞、飽和他動詞、過飽和他動詞が含まれる。半他動詞のばあいには、もし関係概念の変化が組み込まれていないならば、対格に立つ対象は行為主体の状態の変化に付随する条件としてしか見られないために、むしろ不完了の aspekto を内在的なものとしてもつことになると思われる。もちろん今挙げた動詞がもし関係概念(の変化)を表さないならば、完了の aspekto は内在的なものにはならない。

§13 これに対して完全な自動詞のばあいには事情は少しく異なるであろう。なぜならば自動詞のばあいには、関係しうる項が一つしか見あたらないからである。このときに関係概念を導入するとすれば、関係する項の一つは、基幹動詞によって示される「行為」それ自身でしかないことになろう。一方自動詞は関係概念が導入しにくいことによって、ある対象の状態の変化に副次的な条件の集合を加味することによってその意義内容が認定されると考えられるから、本来過程的であると考えられる。したがって前綴による関係概念は過程の限定という形を取ることにならざるを得ない。たとえば *присидеть* 「(ある時間)すわり通す」、*постоять* 「しばらく立っている」のようなばあいである。

さらに自動詞他動詞の区別なく、特別な位置を占めるのは「始発」の意義をもつ前綴である。通常の動詞のばあいにはこれは前綴 *за-* 「始める」によって、また定動詞のばあいに限っては前綴 *по-* によって示されるが、これはその意義からして過程そのものを関係の一方の項としなくてはならない。この両者のばあいについては、さらに検討する必要があると思われる。付言すれば、このような事情は、*начать* 「始める」および *кончить* 「終わる」という動詞のばあいにも妥当するものであると考えられる。今述べた理由によって、この二つの動詞が伴う不定法の動詞が、必ず不完了体動詞でなくてはならないのであると、思われるからである。いずれにしても、接尾辞 *-ну-* による一回体動詞 *semelfactiva* も含めて、これらの動詞については、項を改める必要があると思われる。ここで主張しようとしたのは、完了の aspekto という概念が、観念的な関係概念と密接に関連しているものであるということである。このような語の語彙的意義に内在する aspekto 的なものの上に、文法のレベル、あるいは統語論、語用論のレベルによるさまざまな干渉が入り込んで、現実の aspekto の体系を作っているのだと思われる。ここで述べたのは、したがって aspekto の体系を作る素材についての考察に他ならない。

1999年2月6日脱稿

Summary

Verbal Aspect and it's Lexical Meaning

Iwao YAMAGUCHI

The author discusses here the intrinsic relationship between verbal aspect and lexical meaning from the phenomenological point of view, that is, with regard to the actual process of matters in reality and its way of patterning, or 'moulding' as Edward Sapir put it, into a concrete verbal meaning on the level of a language.

He concludes that what is essential to the perfective aspect is the incorporation of an abstract relational concept, one which is devoid of any notion of process, into the basic meaning of the verbs.